

ロレンスがいたアラビア(上)

作者:スコット・アンダーソン 翻訳:山村 宜子

出版社:白水社

発売日:2016-09-29

1918年、トーマス・エドワード・ロレンス大佐はバッキンガム宮殿に呼び出される。ジョージ五世は笑顔で「贈り物があるんだよ」と語りかける。国王の贈り物とは大英帝国勲章ナイト・コマンダーであった。戦争での活躍が評価されたのだ。ロレンスはナイト爵を授かるうとしていた。子供の頃から騎士の物語に憧れ、三十歳になるまでにはナイトに叙せられることを目指していたロレンスは、ついにその夢を手にいれる。しかし次に彼の口から出た言葉は、その場にいた多くの人々を戸惑わせるものだった。名誉を辞退したのだ。彼は自身もたらした勝利に自責の念を持ち、生涯それから逃れる事ができなかった。

第一次世界大戦においてアラブの反乱軍を指揮し、敵国オスマン帝国を翻弄した戦場の英雄「アラビアのロレンス」とはいかなる男だったのだろうか。彼は引っ込み思案で内向的な性格であり、一人で居る事を好み、関心を寄せる人々を避けるかのように振舞ってきた。その性格はどこか屈折しており、危うさを感じさせる。

中東での彼の行動の結果は、現代においても大きな影響を与え続けている。それゆえに時に英雄と呼ばれ、時に悪魔のような存在とけなされる事もある。ロレンスはアラブの反乱軍を指揮し、アラブ人に独立をもたらしようとした天性のリーダーだったのだろうか。それとも、英国がアラブ人との約束を反故にする事を知りながらアラブ人を扇動し、最後にアラブ人を裏切ったペテン師なのだろうか。ロレンスという男は多くの謎に包まれた存在なのである。